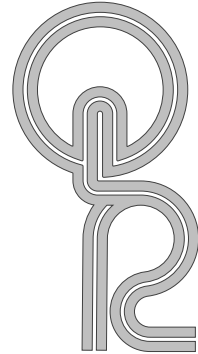


第四紀通信

Vol. 5 No. 5, 1998



鮎沢川河床の足柄層群・生土火砕流堆積物の観察
1998年大会巡検・撮影 - 小林 淳

Vol. 5 No. 5

September 30, 1998

1997年日本第四紀学会論文賞	2	1998年度第1回評議員会議事録	12
学会巡検参加報告(小倉博之)	4	投稿規定の改正について	14
研究委員会1997年度活動報告	5	1998年度総会議事録	15
第7回第四紀学会講習会の案内	6	1997年度決算・1998年度予算	16
機関誌等財政検討委員会経過報告	7	幹事会議事録	18
国内研究集会案内	8	公募・信州大学工学部	18
国際研究集会案内	10	会員消息・紙碑・訂正とおわび	19

1997年日本第四紀学会論文賞

論文賞受賞候補者選考委員会(小泉武栄委員長, 松田時彦, 赤澤 威, 小泉 格, 大場忠道各委員)から1997年日本第四紀学会論文賞者として次の2編の論文の著者を選定した旨報告がありました。授賞理由と受賞者の抱負をここに掲載し、益々の研究の発展を期待します。

兵頭政幸・峯本美代『日本の湖沼堆積物から得られた地磁気永年変化とエクスカ・ションによる年代測定』第四紀研究, 第35巻第2号, 125-133, 1996

授賞理由

6万年前から現在までの歴史・考古時代および最も新しい地質時代は、最終氷期と現間氷期から成っていて、日本人の起源や日本文化の成り立ち、およびそれらに著しい影響を及ぼした海域・湖沼域・陸域などにおける環境変動を数百ないし数千年の時間単位で復元することが必要とされている。そのためには、高精度で正確な年代測定が必要不可欠である。

著者らは、彼ら自身が開発・実用化した直径20cmの大口径採泥器によって湖底から採取した不攪乱柱状堆積物の磁化を高精度で正確に測定すると共に、これまでに得られた湖底堆積物の古地磁気から地磁気の永年変化とエクスカ・ションの情報をまとめ、新たな磁気層序年代測定の可能性を見出した。すなわち、過去2,000年間については考古地磁気による永年変化が年代測定に使い、1.16万年前までは堆積物の偏角・伏角の永年変化に見られる特徴的変動を使い、数百年の間隔で年代測定ができること。1.16万年前から6万年前までは琵琶湖200mコアの60mまでの部分の伏角の永年変化とエクスカ・ション(A, B, C, D)が磁気層序年代として使えること、そしてBlake event(11.6万年前)やBiwa II(19.4万年前)などのより古いエクスカ・ションを用いて30万年前まで遡れることの可能性を詳細な地磁気学的検討を加えて提示した。

6万年前から現在までの年代測定においては、現在、¹⁴C年代測定法が最も幅広く手軽に使用されているが、測定試料の制限や年代値の補正などのほか、他の年代測定との比較検討を行う必要があるとされている。今後は、両者共同によるクロスチェックによってより高精度で正確な年代測定がなされることを期待する。

.....

受賞者の言葉

兵頭政幸(神戸大学)



このたび日本第四紀学会論文賞を授与していただき、まことにありがとうございました。身に余る光栄です。私が安川先生の手ほどきで湖沼堆積物の古地磁気研究を始めてからすでに20年あまり経過しております。当

初は、試料採取から測定法・データ解析まで定まった方法がなく試行錯誤の連続でした。その頃から私の研究は神戸大学安川研究室の人達の支えによるところが大きく、今回の受賞の対象となった研究も然りです。大変感謝いたします。

受賞論文にも関係するので、ここで私の第四紀学会における活動再開のきっかけについて述べさせていただきます。1995年の地球惑星科学関連学会合同大会(於: 日本大学)において、シンポジウム「湖沼堆積物-地球環境変動の“高精度検出計”」が日本第四紀学会が主体となって開催されました。私は、このシンポジウムへの参加を契機に、以後、湖沼堆積物研究者の多い第四紀学会大会にもよく出席するようになりました。また、このシンポジウムの特集号用に書いた論文は、1986年に私が会員になって以来はじめての第四紀研究への投稿論文で、それが受賞の対象になったことは私にとって二重、三重の喜びです。コンピーナをされた日本大学の遠藤邦彦先生、都立大の石渡良志先生、福沢仁之さん、愛媛大の井内美郎先生に感謝いたします。

もともと地磁気原因論など地球物理学的興味で始めた堆積物の古地磁気研究ですが、最近では第四紀の高精度年代決定法の確立に向けて研究を進めています。数百年~数万年の時間スケールで起こる地磁気の永年変化とエクスカ・ションは、すでに確立された古地磁気極性による磁気層序年代法の間隙を埋める期待の星であると考えております。このように地球物理学の方面から、微力ながらも第四紀学の発展に寄与できたらと思っております。今後とも、皆様のご支援、ご指導をお願い申し上げます。

藤原 治・増田富士雄・酒井哲弥・布施圭介・斉藤晃『房総半島南部完新世津波堆積物と南関東の地震隆起との関係』第四紀研究, 第36巻第2号, 73-86, 1997
授賞理由

海域の大地震にともなって、しばしば沿岸の地形や堆積環境が変化する。南関東沿岸域では数段の隆起した海成段丘やその堆積物に元禄関東地震などの大地震が記録されている。

著者らは房総半島南部の完新世堆積物に対して詳細な野外観察を行い、内湾性の砂質泥層を主とする地層の中に、上方に細粒化する砂~砂礫部、基底浸食面、他生の貝の殻片・植物片、平行葉理・偽礫などもつ砂層を10層準以上見だし、それらが津波堆積物であることを明らかにした。そしてそれらの

地層を露頭間に追跡・対比するとともに産状を考慮しつつ¹⁴C年代を用いて主な津波堆積物の時代を求めた。つぎにそれが周辺地域での地層中の浸食不整合面の時代や沼Ⅰ～沼Ⅱ面や三浦半島の野比Ⅰ、Ⅱ面などの海成段丘面の離水の時代にほぼ一致していることを示して、それらの時代に津波を伴う地震があったことを裏付けた。このようなことからこの種の地層観察によって多くの津波地震を見いだすことができることも示された。

著者らの研究は完新世堆積物の観察に新たな視点を持ち込み、地層の成因や段丘生成年代との関係を明らかにするとともに、それが古地震研究のための有力な資料を提供するものであることを示したものである。この種の詳細な地層観察が今後一層、地層学・地形学そして古地震学に寄与することを期待する。

.....

受賞者の言葉

藤原 治

(核燃料サイクル開発機構 東濃地科学センター)



今回は我々の論文に論文賞を頂き、大変光栄に思っております。研究テーマとした津波堆積物の露頭を初めて見てから、早いもので4年が経ちました。遅筆であることに加え、主にアフターファイブに執筆したために、

このような長い期間がかかってしまいました。この間、多くの方々に色々ご支援を頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。

この露頭を初めて見たときは、ただ何となく妙な堆積物があるな、くらいに思っていました。それは、他生の化石や礫が濃集した砂層が、自生の貝化石を含む泥層に繰り返し挟まっていたからです。し

かし、堆積構造や化石の種構成などを詳しく見ていくと、これらの砂層は、普段は静穏な内湾に混濁流(乱泥流)となって運び込まれたことや、海底や海岸のさまざまな場所から掘り起こされた堆積物が混合したことが分かってきました。また、多くの¹⁴C年代から、これらの砂層が房総半島の広い範囲で同時に形成されたことも分かりました。私は、以前からこのような「混合群集」を含む地層の成因について興味を持っていましたが、なかなか良いアイデアがありませんでした。砂層の形成時期が海岸段丘の離水時期と一致することが分かったときは、「なるほど、津波か！」と一気に謎が解けた気がして興奮しました。

津波堆積物は、アメリカ西海岸で古地震の研究の有力な手がかりとして使われるようになってきました。それは若い国であるが故に数百年以上前の文書記録が無く、日本のような地震考古学が難しいからです。しかし、有史以前の地震については、津波堆積物の重要性は日本でも変わらないと考えられます。地層から津波堆積物を読み出すには、堆積学、層序学、古生物学などを総合したテクニックが必要です。そしてこれらは私を含めて地質屋さんの得意とする分野です。そう言った意味で、津波堆積物の研究は、地質屋さんが地震の研究に貢献する一つの機会になればと思っています。

津波堆積物と高潮や洪水などの堆積物を如何にして識別するかが、津波堆積物の研究における最大の課題です。この研究はまだ端緒に着いたところであり、様々なタイプの津波堆積物の記載がなされつつある段階にあります。色々な分野の研究者が協力し合うことによって、上記の課題は解決されていくものと期待しております。我々の研究グループもその一端を担うよう努力したいと思います。



日本第四紀学会総会において1997年論文賞を授与する米倉伸之会長。8月27日、神奈川県立生命の星・地球博物館にて。田口公則氏撮影

1998年 日本第四紀学会大会 巡検参加報告

「国府津・松田断層，神縄断層，箱根火山地域の第四紀層の層序と地殻変動」

小倉博之（大阪市立大学大学院理学研究科・研究生）

今回の巡検は，山崎晴雄氏，今永 勇氏，小林 淳氏の案内により，プレート収斂境界部の激しい変動地域にある第四系の構造と地形を観察し，その地殻変動のイメージを得ることと 箱根火山の新期カルデラ形成以降の地形発達を理解することを目的に実施された。

参加者は36名で女性の参加者も目立った。大会シンポジウム翌日，8月29日午前8時30分に小田原駅西口に集合の予定であったが 前日まで連日のように警報が出された豪雨は列車ダイヤに乱れを残し，予定の時刻に到着できない者もいたようであった。しかし，当日，出発する頃には雲間から晴れ間がのぞくほどに天候は回復していた。

出発して間もなくバスは，足柄平野南東部に分布する鴨宮段丘の段丘崖にさしかかった。平野を流下する酒匂川の扇状地からの比高は約4mで完新世段丘のことだが，縄文海進時の堆積物からは沈降が推定される一方，段丘構成層の最上部に乗る御殿場泥流（約2.5ka）からは隆起が推定されるなど単一でない変動様式が推定されることのであった。本地域に比べ，一般に変動量がかなり小さい近畿から来た筆者らにとっては，常識を越えた変動速度と変動様式を考えなければならぬのかもしれない。

巡検でのストップは，以下の通り9地点予定されていた。それらを順に報告する。

Loc.1 丹沢川（弁天沢）：本露頭は，大磯丘陵南部かつ足柄平野の南東縁に位置し，国府津・松田断層による断層崖を開析する丹沢川にあった。沢の入り口近く，すなわち断層崖の直近では，変動を受けて直立している地層が観察できた。また谷床では，大磯丘陵を構成する中部更新統の田島層とそれを不整合に覆う曾我山層が観察できた。これらは中部更新統のことだが 変動量の大きさに起因するものなのか固結の程度は，近畿地方に分布する中新統の神戸層群ほど固く絞まっており，近畿の地層を見慣れている者にとっては特異にすら感じた。増水のため谷奥に進むことはできなかったが，沢沿いの詳細なルートマップが巡検案内書に掲載されており，再訪の際には容易に露頭を確認できそうである。

Loc. 2 曾我山砂利採取場：ここでは今春まで，45度に傾斜した中部更新統の曾我山層とそれを不整合に覆うT-c以降の段丘堆積物が観察できたそうだが，残念ながら今回は露頭に崩壊防止のために吹き付けられた草の種が一面に発芽しており，案内者の解説を聞きながら目を凝らしての観察となった。

Loc. 3 松田山林道からの眺望：足柄平野北縁に接する標高500mの松田山山頂付近から眼下に足柄平野と流下する酒匂川，また平野北東縁を限る国府津・松田断層の断層崖を観望した。酒匂川は，しばしば洪水をおこし，江戸後期には困窮した農村の復興に二宮尊徳が功績を残したという話や，一時避難的に付け替

えた河道が農民の利害が絡んで元に戻せなかったという話に 変動する大地の上で展開してきた人間活動が重なった。

Loc. 4 丹沢湖畔 落合館：昼食は丹沢湖畔の料理屋2階の座敷にて，ヤマメの甘露煮，山菜天ぷら，蕎麦など山の幸を堪能した。窓からの緑深い眺めと心地よい座敷に，大雨のため窮屈な思いをした本大会中の疲れも癒される思いであった。

Loc. 5 神縄断層：小雨の中，河内川河床に下り立ち，川をはさんで南側に足柄層群，北側に丹沢層群が分布し，目の濁流の下に断層露頭の存在が推定されるとの説明を受けた。

Loc. 6 足柄層群上部塩沢層：山北町透間の採石場では高さ100mほど，幅数百mの全面露頭があり，70度ほどに傾斜した比較的分级の良い円礫層が観察できた。この足柄層群上部塩沢層は全層厚2300m以上とのことだが，どのような場で如何なる堆積様式を考えれば本層相の厚い堆積物が形成されるのか議論された。この礫層中には，大径の生没型立木化石を含む1~2m厚の泥質細粒層が十数m間隔で挟在しており，何らかのサイクリックな堆積環境の変化を示唆しているようである。

Loc. 7 足柄層群中の生土火砕流：鮎沢川河床での観察であったが 若い参加者たちは火砕流堆積物間に挟在する火山灰層中の火山豆石に関心をもった様子で，自ら露頭を削り出し熱心に観察していた。

Loc. 8 長尾峠：箱根火山の外輪山に予定されていた露頭は車窓からの見学に終わったが，バスがカルデラ内壁を降り進むにしたがって広がる仙石原や芦の湖畔ののどかな風景は我々を和ませてくれた。

Loc. 9 芦之湯：最終地点である道路脇の露頭に到着したときには夕暮れが迫っていた。路上から観察したのは，数十枚のテフラ薄層から成る高さ10mほどの赤褐色の崖で 案内書の柱状図を片手にそれらをトレースした。天候のために降りることができなかった道路下の河食崖では，東京テフラ Hk-Tp, -TPfl) 以降 約5万年間のテフラを連続的に観察できるとのことであった。ここでタイミング良く？降り出した雨により，巡検は終わりを迎えた。

本地域では積年の研究により 精緻な時間軸の入った地形発達や地層の変動様式が明らかにされている。今回はその成果のごく一部を案内していただいたに過ぎないが，半日という限られた時間の内で，凝縮された変動地域の地形・地質構造の概観を体験することができたと感じている。さらに観察地点では，露頭を前に議論できる時間が適切にとられており有意義な巡検であった。

末筆ではありますが，準備・案内にお骨折りいただき 天候にも細心の配慮をはらっていただいた案内者の方々にお礼を申し上げます。

研究委員会 1996 年度活動報告

テフラ研究委員会（委員長：町田 洋）

奥飛騨から魚沼丘陵までの地域で 野外巡検を中心とした集会をつぎのように行った。

テーマ：北アルプス起源の前中期更新世テフラとその意義

地域：奥飛騨-松本盆地大峰-聖山-津南-魚沼丘陵
日時：1998.7.5-7 2泊3日

参加者：51名

案内者：原山 智・長橋良隆・町田 洋・鈴木毅彦
巡検の主な話題：

- 1) 奥飛騨における大規模火砕流堆積物の特性，分布，給源，層序，年代．2) 北アルプス起源のテフラの東方地域への追跡．3) 北アルプスなどの山地の隆起と要因；テフロクロノロジーの果たす役割．
- 4) 大峰帯の成立と糸魚川静岡構造線の活動．

夜間集会：つぎのような講演と討論が行われた．

7月5日（日）

J. Westgate：The Tephrochronologic Method

7月6日（月）

壇原 徹：飛騨山脈起源テフラの FT 年代

池田安隆：飛騨山脈の隆起に関する話題：本州中部の広域変動からみる

原山 智：飛騨山脈の隆起に関する話題：一つのモデルの提案

INQUA / GLOCOPH 対応研究委員会（委員長：門村 浩）

1. 前年度に引き続き，科学研究費研究成果公開促進（データベース）の補助を受け，我が国の古水文環境変動データベース作成作業を継続し，データは逐次 Japan Study Group of the INQUA/GLOCOPH Program のホームページ（<http://www.geogr.s.u-tokyo.ac.jp/glocoph/>）上に公開した．
2. 1998年2月13日，立正大学大崎キャンパスで第9回例会を開催し，M. Grossman（Univ. Wisconsin/ 東大）：Extreme floods, typhoon occurrence and climatic change in the Ara River Basin, Japan の報告を聞き討論を行った．
3. 1998年9月4～11日の間，立正大学熊谷キャンパス及び日本アルプス山岳地域で開催予定の第3回地球古水文環境変動（INQUA/GLOCOPH）国際会議（主催：同実行委員会；共催：日本第四紀学会・学術会議第四紀研連；後援：日本地理学会等7学会）に向け，一連の準備作業を行った．参加者約80人（海外30人，国内50人），発表論文73編（口頭39，ポスター34）の予定．

4. 次年度の計画

- 1) 第3回地球古水文環境国際会議の開催（98.9.4-11），同 Conference Volume の編集・出版
- 2) データベース作成作業の継続（科学研究費申請予定）
- 3) 研究例会の開催など

海岸線研究委員会（委員長：大村明雄）

1. 平成9年2月15および16の両日，神戸大学瀧川記念学術交流会館で開催された IGCP 特別シンポジウム「最近地質時代の地球環境」で，本委員会から5つの発表を行い，それらの講演内容を，“月刊地球，vol. 19, no. 9”に公表した．
2. 平成9年10月14日～17日，東京大学山上会館において開催のシンポジウム「第四紀環境変動国際シンポジウム」の Session 4 “Late Quaternary sea-level changes and coastal tectonics”（コンビナー；太田陽子・大村明雄・Berryman, Kelvin）を担当し，口頭発表（5件）およびポスター発表（3件）を行った．
3. 本年2月14日，本学会ミニシンポジウム「喜界島のサンゴ礁段丘に関する諸問題と最近の成果」を開催し，太田陽子・大村明雄・中森 亨の3名それぞれが文部省科学研究費補助金の研究代表者として実施している研究内容を中心とした5つの研究発表を行った．現在，それらの発表内容を学会誌「第四紀研究」に掲載すべく準備中である．

PAGES / PEP II 対応研究委員会（委員長：小野有五）

1. 1997年8月7日：北大で委員会を開催．活動報告を行い今後の国内対応の方針を討議した．PAGES-PEPII では、レス・風成塵や湖成・深海底堆積物を用いた東アジアのモンスーン変動の高精度復元が中心的な課題となっている。それに対応するため、97年大会シンポジウムで「東アジアから西太平洋へー陸・海・ヒトのテレコネクション」を計画したが、引き続き、この課題を中心とした研究を推進することを申し合わせた。とくに、ダンスガード・オシュガー・サイクルやハイブリッド・イベントなど、最終氷期に急激に起きた気候変動の対比や地域的な時期のずれを解明する必要が強調された。また最近2000年間の気候変動を年々、ないしは季節オーダーで解明する研究への対応も検討された。具体的には1997年10月に東京大学で開かれるシンポジウム“International Symposium on Quaternary Environmental Change in The Asia and Western Pacific Region”，1998年4月にロンドンで開催される PAGES OPEN Science Meeting、1998年6

月にオーストラリアのパスで開かれるPAGES-PEPII Symposiumなどで日本の成果を出していくことが確認された。

2. 後者2つの国際集会和、6月にミラノで開かれたPAGES SSCでは、1999年5月7-13日に湘南で第二回IGBP Congressが開催されるため、それに向けて国内の対応を行うことが要請された。これに伴い、11月5日、日本学術会議講堂でシンポジウム「第四紀の急激な気候変動」を計画している(第四紀研連・IGBP研連共催)。南極ドームふじのコア、日本海の海底コアから示される急激な気候変動、現在の黄砂・ダストの供給が気候変動に及ぼす影響、モンスーン変動とエルニーニョとの関連などが予定されている。

アジア太平洋層序研究委員会(委員長:熊井久雄)
この研究委員会はINQUAのSubcommission on Quaternary Stratigraphy of Asia and Pacific Regionの国内対応委員会として、96年の第四紀学会総会で承認されて以降、このSubcommissionの国内委員を呼び掛け人として、参加を呼び掛けまし

たところ、約30名の方々から参加の同意をいただきました。第1年目の活動はこのような組織作りが主なものでした。

本格的な活動は2年目からになりましたが、その主たる事業はは次のようなものでした。そのひとつは、1996年に北京で開催されたSubcommissionのビジネスミーティングで策定されたINQUAインターコングレスの研究計画にしたがって、東アジアの南北(千島列島-沿海州-日本列島-中国沿海部-インドネシア)、東西(中国内陸部-黄土高原-中国平野部-日本列島)の第四系精密対比のを行うための共同研究と討論会の開催です。その第一段階として、南北対比に関するシンポジウムを昨年10月のInternational Symposium on Quaternary Environmental Change in the Asia and Western Pacific Regionで行いました。もうひとつは、国内における第四系特定層準の精密対比ですが、こちらの方はM/L境界付近の地域毎の違いを出すべく会員間で情報交換をしていますが、科学研究費が付かなかったこともあり、昨年度はシンポジウムの開催までには至りませんでした。

第7回 日本第四紀学会講習会の案内

第7回目の日本第四紀学会講習会を「年代を計る 放射性炭素年代の測定に向けて」をテーマに下記の要領で開催いたします。参加を希望される方は参加申し込み方法に従って申し込んで下さい。会場と設備の関係で参加人数を10名程度に限らなければなりません。そのため、申し込み者が多いときは参加希望理由などを参考にして選考をさせていただきますのでご了承ください。選考の結果と詳細は平成11年1月7日頃に郵便かファックスで連絡いたします。

なお、講習会1回あたりの参加人数に限られるため、複数回の同様の講習会を計画していません。第7回以降の講師は、今村峯雄・坂本 稔(以上国立歴史民俗博物館)・中村俊夫・小田寛貴・池田晃子(以上名古屋大学)の5氏です。第8回以降については、改めて案内いたします。

1. テーマ「年代を計る 放射性炭素年代の測定に向けて」
2. 日時：1999年1月30日(土)午後～1月31日(日)遅くとも午後3時まで
3. 場所：歴史民俗博物館
(千葉県佐倉市場内町117番地)
4. 内容：
放射性炭素年代測定のための試料採取・試料調製の基礎のレクチャーと基本的な作業の実践からなります。(内容等の問い合わせ先：国立歴史民俗博物館 今村峯雄 Tel:043-486-0123, Fax:043-486-4209, e-mail: imamura@rekihaku.ac.jp)
5. 宿泊：
原則として各自確保のこととします。少人数は、歴博の宿泊施設を利用できます。
6. 参加費：5000円程度(資料代、講師旅費など、宿泊料は別)
7. 参加申し込み方法：
郵便かファックスで、参加希望者氏名、所属、連絡先と連絡方法(勤務先か自宅の住所・電話・ファックス) 参加希望理由を明記して1998年12月25日(金)までに下記へ申し込んで下さい。

〒285-8502 佐倉市城内町 117
国立歴史民俗博物館 辻 誠一郎 宛
F a x : 043-486-4299

日本第四紀学会 機関誌等財政 検討委員会 経過報告

1998年8月26日

1. 財政危機の現状について

日本第四紀学会の活動は第四紀露頭集の出版や地球惑星関連学会への加盟、第四紀通信の発行など事業は拡大しているものの、その一方で支出総額も拡大し、繰越金が減少を続けている現状で、会計監査からも改善が強く求められていた。そこで機関誌等財政検討委員会を設置し、本学会の財政問題に関して具体的な方策を検討するよう依頼することになった。

2. 経過報告

- (1) 1997年総会において機関誌等財政検討委員会の設置が決定し、幹事は海津正倫・小田静夫・小池裕子・杉山雄一・鈴木三男の5名を委員として指名した。
- (2) 1998年1月24日、米倉会長・真野幹事長・山崎庶務幹事が委員会に参加し、第1回会合が開催された。委員長に小池裕子氏を推薦。財政危機の状況と原因、経費節減への取り組み、収入増への方策、機関誌等のあり方、その他について、意見を交換した。
- (3) 1998年4月18日、第2回会合(真野幹事長・山崎庶務幹事が参加)が開催された。支出削減につき、印刷費、発送料・郵送料、第四紀研究のA4版化・6号化、大会運営、について意見を交換した。
- (4) 1998年6月27日、第3回会合(山崎庶務幹事が参加)が開催され、関連業者からの見積書・学会センターからの回答をもとに、各支出項目を詳細に検討した。

3. 財政改善のための基本姿勢

答申(案)を作成するにあたり、以下を基本姿勢とすることを確認した。

- (1) 学会事業の活性化と確保
- (2) 支出項目の総点検
- (3) 受益者負担の原則：学会大会参加、会誌における特殊印刷など
- (4) 会費値上げの回避

4. 財政改善のための試案

(1) 会誌について

印刷費について

A社(現行印刷所)、B社・C社(学術雑誌発行)の計3社から、B5版年5/6回、A4版年5/6回の4種について見積書をとったところ、高額回答と低額回答とで2倍以上の差があった。至急印刷技術の細部を検討し、印刷所を選定し直す。A4版化について

公用出版物のA4版化が時流であり、A4版化によって図表が大きくなる利点もあるので、印刷費の問題が解決されれば、A4版化を実現することが望ましい。

年6回発行について

現行は通常号4号と特集号1号の年5回発行であるが、それに特別シンポジウムなど(できれば英文特集を企画し英文ページを増やす)1号を加えて、規則的な隔月発行とするのが望ましい。

刊行助成金について

学術雑誌としての向上を図り、年6回定期的発行と英文頁増などを実行して、文部省補助金による財源を復活させる努力をする必要がある。

(2) 会報について

第四紀通信は学会ニューズレターとして貢献しているが、発送費(郵送料)および発送手数料として学会に対する負担が大きすぎる。上記の会誌隔月発行が実現されれば、会報と一括送付が可能になり、発送経費大幅に節減されるであろう。

現行の郵便による配送は会誌のような定期刊行物は安価であるが、規制が多いので、他の配送方法(会員登録制の宅配便など)も比較検討する。

(3) 大会運営について

参加費について

従来、学会より大会運営・巡検準備金として50万円を支出していたが、アルバイト代・会場費など大会運営にはそれでは不十分であり、受益者負担の原則により、今後参加費として大会参加者が負担し、開催校の自主運営とするのが望ましい。主催機関は大学に限らず博物館など自治体との提携や多様化を図る。

(4) 特別講演会・学会賞・講習会補助・研究委員会助成金の支出項目は学会事業として必要なので継続し、学会の活性化を図る。

(5) 学会事務センターに対する業務委託では、会費請求・学会誌など送付費用が全体の50%以上を占めており、上記(2)の等の方策により節減を検討する。

以上、健全な財政には、会費+通常の誌代程度の定常収入(1500万円程度)を見込んだ予算案を計上し、印刷費の大幅削減、会誌・会報の発送費(郵送料+発送手数料)の削減、参加費徴収による大会費項目の削除、などにより現行の2000万円支出体制を1500万円程度に削減すれば、会費の値上げをさげられると考えられる。

P.S. 積み残し

- (1) 会誌編集長の投票による選出と集中化
- (2) 特別事業の復活
- (3) 学会事務センターに対する業務委託の名簿管理について

国内研究集会案内

自然史学会連合第4回シンポジウム

- ・ 自然史学会連合第4回シンポジウム(普及講演会)
- ・ 日時:平成10年10月24日(土)午後1時から5時まで
- ・ 場所:国立科学博物館新宿分館研修館4階講堂
東京都新宿区百人町3-23-1
(JR新大久保駅または大久保駅下車)
- ・ 問い合わせ先:国立科学博物館 遠藤秀紀
Tel:03-3364-7127 e-mail:endo@kahaku.go.jp
- ・ テーマ:干潟の自然史-干潟の過去、現在、未来-
- ・ プログラム:

- (1)干潟の生物とその生態
菊池泰二(海洋生態学、九州ルーテル学院大学)
- (2)干潟生態系の特徴、東京湾の干潟を例に
風呂田利夫(海洋生態学、東邦大学)
- (3)干潟の生物相の危機
和田恵次(海洋生物行動学、奈良女子大学)
- (4)化石になった干潟の貝類
鎮西清高(古生物学、大阪学院大学)

シンポジウム「急激な気候変動・モンスーン変動・ダスト変動の謎をとく」

主催:日本学術会議第四紀研連・IGBP 研連
共催:日本第四紀学会・日本雪氷学会
日時:1998年11月5日(木)10:00 - 17:00
場所:日本学術会議講堂
主旨:

日本によって掘削された南極大陸ドームふじの氷床コアは、第四紀におきた急激な気候変動をどのように記録していたか? 北半球と南半球での気候変動はどちらが先か? 東アジアのモンスーン変動はグローバルな気候変動とどのように関わっているのか? アジア大陸から日本列島や周辺の海域にもたらされるダストの変動は気候変動とどう結びつくか? モンスーン変動とENSOとの関わりは? 現在、最も関心を集めているこれらの問題に答えるため、このシンポジウムを計画した。今回は特に古環境の研究者と、現在の気候変動・ダスト変動の研究者に参加をもち、来年5月日本で開催される第2回IGBP Congressに向けて、PAGES (Past Global Change) とIGAC (International Global Atmospheric Chemistry project), 2つの分野の統合を考えていく上でも役立てたいと考えている。第四紀、雪氷、大気化学、海洋など広い分野の方々の参加、御討論をお願いしたい。

プログラム:

<午前>

- 10:00-10:05 太田陽子(第四紀研連委員長)挨拶
- 10:05-10:20 小野有五:シンポジウムの主旨説明
- 10:20-10:50 渡辺興亜(極地研)「ドームFコアの解析からみた過去35万年の気候変動」
- 10:50-11:20 藤井理行(極地研)「氷床コアに記録された氷期サイクルにおけるダストの変動」
- 11:20-11:50 河村公隆(北大低温研)「エアロゾル有機成分から見た過去数百年の大気輸送:アイスコアと深海堆積物からの情報」
- 11:50-12:15 討論

<午後>

- 13:20-13:50 甲斐憲次(名古屋大)「ダストの輸送と気候変動」

- 13:50-14:20 入野智久(北大)・多田隆治(東大)「日本海深海底コアからみたダスト変動と突然かつ急激なモンスーン変動」
- 14:20-14:50 川幡穂高(地質調査所/東北大学大学院理学研究科)「中緯度域における風送塵の海洋環境に及ぼす影響と低緯度域における高時間解像度の環境復元 - ヘス・ライズの堆積物と石垣島のサンゴ骨格からの解析 - 」
- 14:50-15:05 討論
- 15:05-15:20 休憩
- 15:20-15:50 安成哲三(筑波大)「モンスーンとENSO」
- 15:50-16:20 谷本陽一(地球フロンティア)「10年スケールの気候変動」
- 16:20-16:55 総合討論
- 16:55-17:00 榎根勇(IGBP 研連委員長)挨拶

かみたかもり

上高森遺跡と周辺地域のテフラ巡検

宮城県栗原郡築館町にある高森遺跡や上高森遺跡は、TL法、ESR法、古地磁気法等により、約50万~60万年前に遡ると推定され、現在日本列島最古の遺跡です。各種の両面加工石器をはじめ、チョッパー、スクレイパー等の発見にとどまらず、前期旧石器時代には今まで例のない「一括埋納遺構」が発見されるなど、注目を集めています。

この巡検は、1)発掘調査団のご協力を得て、調査中の上高森遺跡の石器や遺構の状況の観察、2)同様の年代の周辺遺跡(高森、蟹沢遺跡)の地層断面の観察、および、3)最近発見された中期更新世の広域テフラの層相の観察(予定)を目的とします。

日程:1998年11月7日(土)・8日(日) 1泊2日

場所:宮城県栗原郡築館町-岩出山-古川(マイクロバス)

巡検テーマ:上高森遺跡の見学と周辺地域のテフラ観察

巡検予定:7日午後 上高森遺跡の見学、夜 年代・テフラに関するセミナー(宿泊場所の「玉造荘」で)

8日午前 周辺のテフラ観察

集合:7日 13:30 東北新幹線 古川駅前

宿泊:7日 公立学校共済鳴子保養所「玉造荘」

解散:8日 13:30 東北新幹線 古川駅前

案内:発掘調査団・早田勉・長友恒人・豊田新・鈴木毅彦・山田晃弘

連絡先:小野昭 〒192-0397 東京都八王子市南大沢

1-1, 東京都立大学人文学部考古学研究室

Tel.0426-77-2121 Fax.0426-77-2112

e-mail:ono@bcomp.metro-u.ac.jp

参加費:約15000円(宿泊費、マイクロバス代を含む)

費用は当日集めます。

申し込み方法:都立大 小野(上記連絡先)まで、氏名・性別・連絡先(電話とファックス番号、あればe-mailアドレス)を明記して申し込み下さい。連絡手段は、間違いを防ぐため、手紙・ファックス・e-mailのいずれかでお願います。電話不可。

締め切り:1998年11月1日(厳守)

人数:先着28名で締め切ります。至急お申し込み下さい。事前に予約の申込金は取りませんので、途中でキャンセルの無いように願います。参加希望者が規定に達しない場合、中止することがあります。マイクロバス利用と宿泊の関係で28人を限度として締め切りますが、マイクロバスと宿泊に関係なく遺跡の見学をされる場合は自由にできますので、念のため申し添えます。11月3日に参加予定者には最終案内を発送します。

日本サンゴ礁学会 第1回大会・公開シンポジウム

昨年設立された日本サンゴ礁学会では、下記の通り第1回大会を開催いたします。講演申込はすでに締め切っておりますが、サンゴとサンゴ礁に関する生態・生理・地学・化学・工学・文化など幅広い分野から約50件の研究発表が予定されております。関心のある多数の方がご参加されることを期待しております。また11月3日には、公開シンポジウムを開催いたします(参加費無料)。

- ・日本サンゴ礁学会第1回大会
日時:1998年11月1(日), 2(月)
場所:東京大学山上会館
事務局:東京大学理学系地理 茅根 創 (Fax: 03-3814-6358; e-mail:kayanne@geogr.s.u-tokyo.ac.jp)
- ・日本サンゴ礁学会公開シンポジウム
日時:1998年11月3日(火)12時半~17時
場所:早稲田大学イブカホール
内容:
12時半~13時半 ビデオ上映,
13時半~15時基調講演 Prof. Alina Szmant 「サンゴ礁から学ぶ人類の未来」,
15時~17時 パネルディスカッション
「初めて知るサンゴ礁の神秘 - 進化, 環境, 社会」
総合司会:山根一眞(ノンフィクション作家)
パネラー:近森 正(慶応大学), 大森 信(東京水産大),
土屋 誠(琉球大学), 工藤君明(海洋科学技術センター),
茅根 創(東京大学)
共催:世界サンゴ礁保護協会

「アジア活火山サミット」

期日:平成10年11月1~3日
主催:鹿児島市
情報:<http://iinet.chukaku.pref.kagoshima.jp/kagoshima/kazan/> または kikaku@mail.sun-net.or.jp

「火山とくらしと防災 - 火山工学の展望」討論会

上記「アジア活火山サミット」と同時に国際的な討論会が開催されます。
日時:平成10年11月3日(火)13:00-17:00
場所:鹿児島大学稲盛会館
参加費:無料(定員200名)
問い合わせ、参加申し込み、連絡先:〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-40 鹿児島大学工学部 北村 良介
TEL:099-285-8473, 8475 FAX:099-285-1738
E-mail:kitamura@oce.eng.kagoshima-u.ac.jp
プログラム(案)
開会挨拶(13:00-13:05)
火山工学研究小委員会 委員長 北村 良介
第I部(13:05-14:55)
「火山と仲良く暮らすには(恵みと建設)」
コーディネーター:後藤 恵之輔(長崎大学)
基調講演:「環境に配慮した火山防災施設について」
建設省大隅工事事務所桜島砂防出張所所長 和田 健二
パネルディスカッション「火山と仲良く暮らすには」
パネリスト:和田 健二(桜島砂防出張所), 山中 寿朗(九州大学大学院生), 阿部 司(東北大学)
第II部(15:10-17:00)

「防災アセスメントと地域防災計画」
コーディネーター:高橋 和雄(長崎大学)
基調講演:「活火山地域の防災計画と課題」
東京大学社会情報研究所教授 廣井 脩
パネルディスカッション「防災アセスメントを地域防災計画に活かすには」パネリスト:廣井脩(東大社会情報研), 塚本哲(国際航業(株)), 石橋晃睦(日本工営(株)), 中川一(京大防災研), 木村拓郎(社会安全研究所)

第13回「大学と科学」公開シンポジウム

- 生きている地球の新しい見方 - 地球・生命・環境の共進化 -
主催:第13回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会
後援:文部省
日時:平成10年11月21日(土)~22日(日)
場所:東京/朝日ホール
参加費:無料
第1日目 10月21日(土) - 10:00~17:00
A. 挨拶 第13回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会 文部省
B. 全地球史解読計画は成立するか?
司会(名古屋大学) 高野雅夫
1. 新しい地球観を求めて - 地球の歴史を解読する試み (名古屋大学) 熊澤峰夫
2. 変動する地球 - 中心核から海の水まで (東京工業大学) 丸山茂徳
3. 変貌する地球をコンピュータで再現する (東京大学) 瀬野徹三
C. 地表に刻まれた地球中心からの情報と宇宙からのメッセージ 司会(東京大学) 瀬野徹三
4. 大昔の地球磁石の謎 (東京大学) 濱野 洋三
5. 隕石の爆撃を受ける宇宙に無防備な地球 (京都大学) 藪下 信
6. 太古、月は近かった (国立天文台) 大江昌嗣
7. 地球の気候を変動させる宇宙のしくみ (国立天文台) 伊藤孝士
8. 地層の編纂から解読する地球史 (名古屋大学) 高野雅夫
第2日目 11月22日(日) - 10:00~17:00
D. 過去の地球環境と生命から未来を考える 司会(名古屋大学名誉教授) 熊澤峰夫
9. 昔の気候と未来の地球 (東京大学) 阿部彩子
10. 大洋と大気と大陸は昔どうだったのか? (北海道大学) 山中康裕
11. 地球と共進化する生命 (岐阜大学) 川上紳一
E. われわれはどこからきたのか? 司会(岐阜大学) 川上紳一
12. 40億年前の熱い地球を忘れない生きものたち (東京薬科大学) 山岸明彦
13. 生命が地球を変えた? (岡崎共同研究機構基礎生物学研究所) 伊藤 繁
14. 奇妙な生きものたちの饗宴(京都大学) 大野 照文
15. 史上最大の生命絶滅事件の謎をとく (東京大学) 磯崎行雄
F. われわれはどこへ行くのか? 司会(東京大学) 磯崎行雄
16. 地球史上の大事件がはじまっている (名古屋大学名誉教授) 熊澤 峰夫
お申込み・お問合せ先 『生きている地球』事務局 〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-16-7 ビュア虎ノ門3F (株)アドスリー内 TEL:03-3459-0006 FAX:03-3459-6894 E-mail:info@adthree.com URL:http://www.adthree.com

「八幡平地すべり・土石流災害調査委員会」
 成果報告会および火山地域における地盤災害
 に関する研究発表会

主催:(社)地盤工学会八幡平地すべり・土石流災害調査委員会
 日時:平成10年11月24日(火) 10:00-17:00
 場所:地盤工学会大会議室
 (東京都千代田区神田淡路町2-23 菅山ビル)
 プログラム:
 午前の部:委員会報告 10:00-12:00
 午後の部:研究発表会 13:00-17:00
 会費:未定(但し、発表論文集代)
 申込み方法:FAXで参加者氏名、所属、会員・非会員の別、
 FAX番号、電話番号、Eメールアドレスを記入して下
 記へお申し込み下さい(電話での受付は致しません)。先
 着順に受け付けます。学会より連絡がない場合は受付し
 たものと見なし、定員に達したときには折り返しご連絡
 いたします。
 申込み・問い合わせ先:社団法人 地盤工学会
 「八幡平地すべり・土石流災害調査委員会」研究発表会係
 FAX:03-3251-7636

国際研究集会の案内

千葉大学国際シンポジウム

「環境と地下水に関する国際シンポジウム」

主催:千葉大学
 共催:IAH国内委員会
 後援:日本地下水学会、日本水文科学会
 日時:1999年1月12日(火)ー1月14日(木)
 会場:千葉大学けやき会館
 講演募集:一般講演を募集しています。テーマは:(1)水循環
 と地下水(2)水文地形と地下水(3)地下水汚染と物質輸
 送(4)都市の地下水問題(5)地下水解析のための新しい技
 術。講演をいただける方は10月20日までに事務局まで
 お知らせ下さい。E-mailでも結構です。4ないし6ペ
 ージ程度のアブストラクト締め切りは11月30日の予定
 です。詳細はSecond Circularでお知らせします。First
 Circularをご希望の方は事務局までお知らせください。
 問合せ先:(事務局)千葉大学理学部地球科学科 佐倉保夫
 〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33
 TEL043-290-2844 FAX043-290-2874
 E-mail:ysakura@earth.s.chiba-u.ac.jp

Research Conference on Glacial-InterGlacial
 Sea Level Changes in Four Dimensions: Qua-
 ternary Sea Levels, Climatic Change and
 Crustal Dynamics

期日:1999年2月13-18日 [登録締切:1998年11月2日]
 場所:Albuferia(ポルトガル)
 Chair Person: Alastair G. Dawson, Coventry, UK
 内容:以下の8セッションがあります。カッコ内は発表者。
 1. Quaternary sea Levels, Global Changes and Ocean
 Volume Fluxes (Morner and van de Plassche), 2.
 Paleoceanography, Climate Change and Sea Level
 (Devoy and Groot), 3. Coral Records of Quaternary
 Sea Level Change(Pirazzoli and Fairbanks), 4. IPCC
 Scenarios of Sea Level Change; Past, Present and

Future (Tooley and Raper), 5. Quaternary Sea Lev-
 els and Earth Rheological Models (Peltier and
 Lambeck), 6. Quaternary Sea Level Changes in Tec-
 tonically Active Regions (Stiros and Paskoff), 7. Qua-
 ternary Sea Levels, Isostasy and Crustal Deforma-
 tion (Smith and Clague), 8. Methological Problems
 in Reconstructing Quaternary Sea Levels (Shenann,
 Morhange, and Plag)

連絡先: Dr. Josip Handekovic, European Science
 Foundation; Fax. +33 388 76 71 35, E-mail.
 euresco@esf.org http://www.esf.org/euresco

「アジアにおける陸と海のリンク」物質輸送
 と地層形成に関する国際ワークショップ

現在の地球表層において、地球環境や物質循環に大きな
 影響を及ぼしているアジアーオセアニア地域を対象とした
 国際ワークショップが、1999年3月16-19日につくば市の
 研究交流センターで、地質調査所と科学技術国際交流セン
 ターによって開催されます。これらの地域は、ヒマラヤや
 チベットから流下するインダス川、ガンジス・グラマブト
 ラ川、メコン川、長江、黄河などを通じて、また熱帯雨林
 の高い山地を有する島嶼の小河川を通じて、世界全体の約
 7-8割とも推定される堆積物が海域に供給されています。
 また世界の人口の半分以上が居住している地域でもあり、
 河川や沿岸域への人為的影響が地球規模で懸念されてい
 る場所でもあります。ワークショップでは、西太平洋に多く
 分布する縁海の役割、河川から深海への物質輸送と人為的
 影響、また第四紀層を対象とした地層/シーケンス形成と
 環境変動に焦点をあてて行われます。

会場:研究協力センター(つくば市竹園)
 日程:1999年3月15日登録,3月16-18日ワークショッ
 プ,3月19日地質巡検
 発表形態・内容:発表は、基調講演を中心に行われる予定
 で、一般発表は口頭紹介付ポスターで行われます。現在
 予定されている基調講演は20件、海外からは30名の参
 加を見込んでいます。主なテーマと海外からの参加者は
 以下の通りです。
 縁海の役割と重要性:角皆静男(北大)・高橋孝三(九大)
 黄河・長江・東シナ海の物質輸送:井関和夫(中央水研)
 HU Dunxin (中国)・YANG Zuosheng (中国)・SHEN
 Huangting (中国)
 東シナ海の地層形成: LIU Zhanxia (中国)・ZHAO
 Quanhong (中国)
 メコンデルタの地層形成: Nguyen Lap Van (ベトナム)
 タイ沿岸・スダ陸棚の地層形成: Sin Sinsakul (タイ)・
 Thanawat Jarupongsakul (タイ)・How Kin Wong
 (ドイツ)
 ニューギニア島の物質輸送: Gregg J. Brunskill (オース
 トラリア)
 ガンジス・ブラマブトラデルタ・ベンガルファンの物質
 輸送と地層形成: V. Subramanian (インド)・Steve
 Kuehl (米国)・Herman Kudrass (ドイツ)
 インダスデルタ・アラビア海の物質輸送: George
 Postma (オランダ)・Venugopalan Ittekkot (ドイツ)
 日本周辺の物質輸送と地層形成: 平 朝彦(東大)
 アジアの物質輸送: John D. Milliman (米国)
 太平洋周辺の物質輸送と地層形成: Mike Field (米
 国)・Chuck Nittrouer (米国)
 ヨーロッパ周辺の物質輸送と地層形成: Serge Berne (フ
 ランス)・Serge Heussner (フランス)
 地質巡検: 3月19日に日帰りの地質巡検「関東平野上部更
 新統の浅海相とシーケンス(仮題)」を行います。案内者、

伊藤 慎・参加費は2,000円です。定員は40名で、海外からの参加者、発表者を優先し、先着順となります。

- ・一般発表の受付：物質輸送や地層形成に関して、水路実験、現在の海洋での調査研究、陸上の地層の研究など、幅広く受け付けます。発表希望の方は、11月20日までに英文要旨を250語以内で、事務局まで電子メールでお送りください(タイトル、著者、所属、本文)。要旨受理の連絡は12月に行います。1月15日が拡大要旨(カメラレター、4-8ページ)の締め切りとなっています。拡大要旨はワークショップ当日参加者に配付されます。またプロシーディングを国際誌の特集号から発刊する予定です。
- ・登録：参加希望の方は、11月20日までに、氏名、所属、連絡先住所(以上英文と和文)、電子メールアドレス、Tel & fax 番号、発表の有無、巡検参加の有無を、できるだけ電子メールで事務局まで送付してください。登録して頂いた方には、セカンドサーキュラーを送付し、参加費は無料の予定です。会場、予算との関係から登録参加者は、発表者、海外からの参加者を優先し、100名ま

でとさせていただきます。

- ・エメリー教授追悼: このワークショップの企画後、1998年4月12日に元ウッズホール海洋研究所の Kenne th O. Emery 教授が亡くなりました。Emery 教授は東アジアから東南アジアにかけての陸棚域において 堆積物や海水準変動に関する先駆的な研究を行っています。彼のアジア地域への多大な貢献に敬意を表し、今回のワークショップには彼と長年仕事を同じくしてきた John D. Milliman(VIMS)と相談の結果、Emery 教授追悼国際ワークショップ「アジアにおける陸と海のリンク」の副題が付けられています。

- ・本ワークショップへの問合せ及び要旨・登録の送付先：
国際ワークショップ事務局
地質調査所海洋地質部 斎藤文紀
電子メール yoshi@gsj.go.jp
305-8567 つくば市東1-1-3。
電話 0298-54-3772, Fax 0298-54-3533)

資料(2)

貸借対照表

(1998年7月31日現在) (単位:円)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
流動資産		流動負債	
預け金	1,660,650	未払費用	2,246,997
小口現金	442,838	前受会費	9,331,244
普通預金	42,408	積立金	4,450,000
定期預金	4,450,000	小計	16,028,241
金銭信託	7,210,000	前期繰越金	1,299,192
貸付信託	2,000,000	当年度剰余金	-736,987
立替金	8,342	(次期繰越金)計	562,205
未収入金	776,208		
合計	16,590,446	合計	16,590,446

財産目録

(1998年7月31日現在)

資産の部 (単位:円)

科目	摘要	金額
預け金	財団法人日本学会事務センター	1,660,650
小口現金	編集	442,838
普通預金	三井信託銀行 / 上野支店	42,408
定期預金	三井信託銀行 / 上野支店	4,450,000
金銭信託	三井信託銀行 / 上野支店	7,210,000
貸付信託	三井信託銀行 / 上野支店	2,000,000
立替金	別刷代 34巻2号, 34巻3号	8,342
未収入金	会員名簿広告収入	460,000
	誌代(露頭集)	316,208
合計		16,590,446

負債の部 (単位:円)

科目	摘要	金額
未払費用	日本第四紀通信印刷費 Vol. 2-5	99,807
	会員名簿印刷費	926,200
	会員名簿発送費	570,990
	特別刊行物編集費	650,000
前受会費	1998年度会費	9,331,244
積立金	INQUA積立金	1,000,000
	役員選挙積立金	200,000
	予備費積立金	3,250,000
合計		16,028,241

資料(4) 1997年度業務委託費

(1997年8月1日~1998年7月31日)

I. 会員業務費用	3,051,825
1. 会員管理費	180,000
2. 会費請求・学会誌等送付費用(年11回)	2,340,990 (2,109 × 1,110円)
3. 新入会員登録手数料	69,300 (99 × 700円)
4. 住所等変更手数料	130,800 (218 × 600円)
5. 特別請求書発行手数料	163,000 (105 × 1,200円)
	(37 × 1,000円)
6. 追加送付手数料	57,600 (576 × 100円)
7. 多部送付手数料	2,135 (7 × 305円)
8. 学会誌保管費用	108,000 (6段 × 18,000円)
II. 受付業務費用	320,000
III. 会計業務費用	468,000
消費税負担額 5%	191,991
合計	4,031,816

資料(5) 1998年度業務委託費見積

(1998年8月1日~1999年7月31日)

I. 会員業務費用	3,152,135
1. 会員管理費	180,000
2. 会費請求・学会誌等送付費用(年12回)	2,436,000 (2,100 × 1,160円)
3. 新入会員登録手数料	70,000 (100 × 700円)
4. 住所変更手数料	138,000 (230 × 600円)
5. 特別請求書発行手数料	163,000 (105 × 1,200円)
	(37 × 1,000円)
6. 追加送付手数料	55,000 (550 × 100円)
7. 多部送付手数料	2,135 (7 × 305円)
8. 学会誌保管費用	108,000 (6段 × 18,000円)
II. 受付業務費用	320,000
III. 会計業務費用	468,000
消費税負担額 5%	197,006
合計	4,137,141

評議員会議事録 (1998年度第1回)

日時: 1998年8月26日(水) 17:30 ~ 19:00

場所: 神奈川県立生命の星・地球博物館講義室

議長: 大村明雄

出席者: 米倉伸之(会長), 太田陽子(副会長), 真野勝友(幹事長), 海津正倫, 遠藤邦彦, 大村明雄, 岡田篤正, 奥村晃史, 小田静夫, 小野 昭, 織笠 昭, 菊地隆男, 斎藤文紀, 坂上寛一, 杉山雄一, 鈴木三男, 竹村恵二, 陶野郁雄, 福沢仁之, 松浦秀治, 松下まり子, 松田時彦, 宮武頼夫, 山崎晴雄, 吉川周作(以上評議員), 松島義章(オブザーバー), 委任状 15通

浜田隆士大会実行委員長(代理松島義章)及び米倉伸之日本第四紀学会会長の挨拶の後, 下記の報告及び審議が行われた。

I 報告事項

1. 1997年度事業報告

1-1. 庶務

- (1) 会員動向(1998年7月31日現在): 正会員1,837名(うち, 学生費会員163名, 海外会員23名を含む), 名誉会員7名, 賛助会員16社, 団体購読会員105団体。逝去会員は秋山純, 小野晃司, 島倉巳三郎, 土屋隆, 横井定, 渡邊仁, 和田信。
- (2) 1997年度第1回評議員会を1997年8月5日に北海道大学大学院地球環境科学研究科会議室で開催した。出席者26名, 委任状18通。議長: 小泉 格。8月6日には北海道大学学術交流会館大講堂において日本第四紀学会総会を行った。
- (3) 以下のシンポジウム・講演会等の協賛および後援を行った。
 - ・第12回「大学と科学」公開シンポジウム, セッション「マグマと地球」(97.11.2 ~ 3: 文部省学術国際局)
 - ・セッション「文化財を探偵する」(98.1.31 ~ 2.1: 文部省学術国際局)
 - ・海洋調査技術学会第9回研究成果発表会(97.11.14 ~ 15: 海洋調査技術学会)
 - ・第5回アジア学術会議 科学者フォーラム(98.3.10 ~ 13: 日本学術会議)
 - ・国際シンポジウム「琉球列島(南西諸島) 島嶼型動物相の適応放散と絶滅の舞台」(98.11.5 ~ 11.9: 鹿児島大学稲盛会館)
 - ・第13回「大学と科学」公開シンポジウム, セッション「生きている地球の新しい見方 地球・生命・環境の共進化」
- (4) 第17期学術会議第四紀研連委員候補者として, 小泉格, 吉川周作, 増田富士雄, 小野有五, 町田 洋, 小池裕子, 小野 昭, 坂上寛一, 大場忠道, 太田陽子の10氏を推薦した。古生物研連へは小泉 格氏を推薦した。
- (5) 日本地理学会より依頼のあった地理学協会連合(仮称)準備会への出席・加盟については, 日本第四紀学会は参加しないことに決定した。
- (6) 1997年7月の時点で長期の会費未納により雑誌の発送停止となっている会員155名に対しては, 状況を示すリストを整え, 会費請求の督促を行った。そして, 4年間以上会費を滞納し督促に応じない146名の会員については, これを除名した。
- (7) 寄贈・受け入れ図書 of 整理を行った。

- (8) 機関誌財政等検討委員会を設立し, その事務を行った。委員は幹事会が, 小池裕子, 杉山雄一, 鈴木三男, 海津正倫, 小田静夫の各会員を指名し, 互選により小池裕子会員が委員長に就任した。
- (9) Island Arc 誌のEditorial Advisory Board メンバーに斎藤文紀会員を推薦した。
- (10) 1997年度第2回評議員会を1998年2月14日, お茶の水女子大学生生活科学部本館において実施した。出席者23名, 委任状15通。
- (11) 論文賞受賞候補者選考委員会を組織し, その運営を行った。委員には会長が分野を併記して指名した11名の会員の中から, 評議員の投票により小泉武栄, 松田時彦, 赤澤 威, 小泉 格, 大場忠道の5会員が選出され, 委員長には互選により小泉武栄会員が就任した。

1-2. 編集

- (1) 「第四紀研究」36巻4号(原著論文4編, 短報1編, 66頁), 5号特集号「最終氷期と縄文文化の成立・展開」(原著論文6編, 要旨再録3編, 86頁), 37巻1号(原著論文2編, 総説1編, 短報1編, 66頁), 2号(原著論文4編, 短報1, 雑録1編, 94頁), 3号特集号「東アジアから西太平洋へ-陸・海・ヒトのテレコネクション-」(原著論文13編, 128頁)の合計440頁を刊行した。すでに受理済みの論文は, 原著論文12編, 短報1編, 資料1編であり, 37巻4号以降に順次掲載予定である。審査中の論文は19編である。機関誌刊行月の10・12・2・5月刊行が予定どおりおこなわれ, 特集号の7月刊行もほぼ予定通り実現できた。
- (2) 編集の状況が多少なりとも会員に伝わるようにするため, 37巻1号から, 「編集委員会だより」を巻末に掲載している。あわせて, 機関誌の内容の幅を広げるために, 解説・講座欄の実現に向け準備をおこなった。この一年間で論文の投稿数は上向きに転じている。
- (3) 現行の投稿規定(1991年1月改正)の改訂をおこない, 幹事会原案を評議委員会へ提案した。

1-3. 行事

- (1) 1997年度大会(総会・公開シンポジウム・一般研究発表)を北海道大学の学術交流会館において, 1997年8月5 ~ 7日に開催した。5 ~ 6日は一般研究発表(口頭発表61件, ポスター31件), 総会, 及び懇親会を行った。7日はシンポジウム「東アジアから西太平洋へ-陸・海・ヒトのテレコネクション-」(オーガナイザー: 小泉 格, 大場忠道, 小野有五)を実施した(話題提供17件)。会員及び非会員を含め約300人が参加した。
- (2) 日本学術会議第四紀研究連絡委員会と共催で, 「アジア・西太平洋地域における第四紀環境変動に関する国際シンポジウム」(International symposium on Quaternary environmental change in the Asia and western Pacific region)を1997年10月14 ~ 17日に 東京大学山上会館において開催した。6つのセッションにおいて, 合計口頭発表53件, ポスター発表34件の研究発表が行われた。国内98名, 国外12ヶ国から42名, 合わせて140名の参加があり成功裏に終了した。プロシーディングは各セッション毎に出版される予定である。
- (3) 1998年5月26日 ~ 29日に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた1998年地球惑星科学関連学会合同大会において, 第四紀学会から提案したセッション「第四紀」(コンピーナー: 斎藤文紀, 山崎晴雄)を27日午後に行った。9件の口頭発表と10件

のポスター発表を行い、最大時で100名前後の参加があった。なお、合同学会のプログラムの会員への配付に関しては、経費削減のため、希望者のみの配付に変更した(第四紀通信4巻6号参照)。

- (4) 1998年度日本第四紀学会大会の総会、シンポジウム、巡検等の準備を行った。大会は、1998年8月26～28日に神奈川県立生命の星・地球博物館で行われる(実行委員長:濱田隆士)。26～27日に評議員会、一般研究発表、総会、懇親会、28日にシンポジウム「相模湾周辺の地震・火山とテクトニクス」(オーガナイザー:山崎晴雄,太田陽子,松島義章)が行われる。また29日に巡検「国府津・松田断層,神縄断層沿いの地域における第四紀層の層序と変動」(案内:山崎晴雄,今永勇,小林淳)と松田時彦会員による普及講演会を行う。
- (5) 1999年地球惑星科学関連学会合同大会(1999年6月8～11日に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催)の第四紀学会からのプログラム委員として、齋藤文紀,大場忠道両会員を選出し、1999年大会に向けて準備を行った。(6) 1999年度日本第四紀学会大会の会場選定を行い、京都大学に依頼を行い、京都大学において1999年8月23～25日に一般研究発表、総会、シンポジウムを、26～27日に巡検を行うことで決定した。

1 4. 企画

- (1) 第5回第四紀講習会を10月18・19日に青森県の三内丸山遺跡体験学習館で開催した。テーマは「遺跡の環境と生業の復元 動物遺体群を調べる」で講師は西本豊弘・樋泉岳二・岡田康博の各氏にお願いした。参加者は25名。第一日目は動物考古学の解説と縄文時代の道具・手法によるイノシシの解体、骨格標本の作製実習を行った。第二日目は遺跡から出土している魚類の骨格標本作製実習を行った。この実習の様子はテレビ、新聞等にも取り上げられ、第四紀学会の活動の一端が社会に報道された。
- (2) 『第四紀露頭集』を昨年9月から本年7月までに約200冊を販売した。
- (3) 日本第四紀学会ミニシンポジウム「南西諸島喜界島のサンゴ礁段丘に関する諸問題と最近の成果」を1998年2月14日、14:00～18:00、お茶の水女子大学生生活科学部本館208号室において開催した。オーガナイザーは太田陽子・大村明雄・中森亨、参加者は55名であった。

1 5. 会報

- (1) 『第四紀通信(QR Newsletter)』Vol. 4 No. 5(1997年9月), Vol. 4 No. 6(1997年11月), Vol. 5 No. 1(1998年1月), Vol. 5 No. 2(1998年3月), Vol. 5 No. 3(1997年5月), Vol. 5 No. 4(1998年7月)を刊行した。
- (2) 文部省学術情報センターのインターネットWWWサーバ上の日本第四紀学会ホームページを通じて広報を行った。

1 6. 渉外

加盟学会連合等の活動状況について

- (1) 地球惑星科学関連学会の1999年合同大会(6月8日～11日)に向けて、現在セッション・シンポジウムが募集されている。来年度も大会投稿登録システムの電子化が継続され、さらに予稿集のCD-ROM化が検討されている。1998年度は、合同大会から本学会員への

プログラム集の送付は希望者のみとしたため、送料は1万6千円に節約された。

- (2) 自然史学連合の臨時総会が1998年7月11日に開催され、科研費「自然史科学」(時限付き)配分委員候補者の推薦について討議された。加盟学協会から、前回に委員を出した学協会を除いて、所属大学がダブルにならないように、推薦順位を付けて12名を選出した。時限は来年度公募で終わりとなるが、継続を図るため申請件数を増やすようにとの要請があった。10月24日に、第4回シンポジウムが「干潟の自然史」のテーマで開催される。
- (3) 地球環境科学関連学会協議会の第2回協議会が1998年7月27日に開催され17学会から委員19名が出席した。事務局から、協議会のホームページを開設し、加盟学協会のホームページとリンクする準備中であるとの説明がされ、また、地球環境科学を俯瞰する専門書シリーズ(全10巻程度)を出版する計画、加盟学協会への協力の要請、編集委員会の発足について提案があり討議された。

2. 1997年度決算報告・会計監査報告

松浦秀治会計幹事より別添資料(p. 12, 16, 17)に基づき決算報告があった。学会収入は第四紀露頭集の売上げが伸び悩んだことと、不況により名簿の広告収入が大幅に減ったことが大きく響き、当初予算に比べて122万円程下回った。一方、支出は印刷費や特別講演会費、その他経費が種々の努力により低く抑えられたため、予定を124万円程下回った。全体では収入の不足を支出の削減で補ったが、元々、支出が収入を上回る赤字予算であったので、次期繰越金は昨年度に比べ74万円減少し、56万円となった。

引き続き、遠藤邦彦会計監査より予算の執行、帳簿・証券の整理等、正常適切に処理されている旨、監査報告があった。また、執行部が財政再建に向けて様々な努力を行っている現状に鑑み、今回は付帯意見は見送られた。そして、会計監査の感想(p. 15)が読み上げられた。

3. 日本学術会議・第四紀研連報告

太田第四紀研連委員長より17期研連の活動報告があった。

- (1) 国際第四紀学連合(INQUA)の活動状態の周知を計って、INQUA要覧の翻訳を第四紀研究37巻2号に掲載した。
- (2) 1999年の南アフリカ、ダーバンでのINQUA大会に配布するために、日本第四紀学会と共同で、日本における最近の第四紀研究の進展を展望する論文を集め、第四紀研究の特集号として1999年7月に発行する。
- (3) 第四紀研究の進展と普及をめざして、いくつかの国内または国際シンポジウムを開催する。これらはいずれも日本第四紀学会との共催とする。第一回のシンポジウムは1998年11月5日に日本学術会議において、南極の氷床コアの解析による第四紀環境変遷に関するものを行う。
- (4) そのほか第四紀研究の発展、国際協力に関する行動を積極的に行う。

4. 学会論文賞の報告

小泉武栄論文賞受賞候補者選考委員会委員長(代理:山崎庶務幹事)より、選考経過と結果の報告があった(受賞者、受賞理由については別途報告)

5. 機関紙・財政等検討委員会報告

小池裕子機関紙・財政等検討委員会委員長（代理：山崎庶務幹事）より、検討結果の報告があった（内容については別途報告）。

6. 訃報記事の取り消し

第四紀通信5巻4号の会員異動欄で5月25日に退会された森一郎さんにつきまして、誤って、訃報記事を掲載してしまいました。森さんはご健在で、この記事は庶務幹事のミスによるものでした。森さん並びに関係各位にたいへんなご迷惑をおかけしましたことを深くお詫びいたします。また、訃報記事を取り消し、次号の第四紀通信に訂正記事を掲載します。

審議事項

1. 1998年事業計画

1-1. 庶務

- (1) 学会受け入れ圖書の整理を進める。
- (2) 1998年度において活動を希望する研究委員会を内定し評議員会に諮る。
- (3) 論文賞受賞候補者選考委員会を組織し、その運営を担当する。また、論文賞のあり方について再検討する。
- (4) 機関紙・財政等検討委員会の提言をふまえて、幹事会において財政健全化のための具体的な施策を検討し、実行する。
- (5) 1999年度文部省科学研究費学術刊行物補助金の申請を行う。

- (6) 選挙管理委員会を組織し1999～2000年度の日本第四紀学会会長・副会長・評議員及び役員選挙を行う。

1-2. 編集

- (1) 「第四紀研究」37巻4号、5号、38巻1号、2号、3号を編集し、定期刊行する。なお、38巻第1号から年6号化を実施する。
- (2) 解説・講座欄への原稿掲載を実現する。
- (3) 1999年8月開催の国際第四紀学連合の大会（南ア・ダーバン市）へ向けた特集号（日本における第四紀研究の進展を内容とする）を日本学術会議第四紀研連と共同で編集し、1999年7月中旬までに刊行する。
- (4) 1998年度大会シンポジウム「相模湾周辺の地震・火山とテクトニクス」の特集号の編集委員会を設置し、企画・編集にあたる。

1-3. 行事

- (1) 1998年度日本第四紀学会大会を神奈川県立生命の星・地球博物館で開催する。
- (2) 1999年6月に行われる1999年地球惑星科学関連学会合同大会に参加するための準備を行う。
- (3) 1999年度日本第四紀学会大会の準備を行う。大会は、1999年8月23～25日に京都府京都市の京都大学において開催する。
- (4) 2000年度日本第四紀学会大会の開催地を選定する。

投稿規定の改正について

改正前

- 2. 第四紀研究に掲載される原稿 内容が日本第四紀学会の会誌の記事として適切であり、体裁が別に定めた「執筆要領」に合致すると編集委員会が認めたもの。
 - 2-1. 言語：和文または欧文（英・独・仏・西・露）
 - 2-2. 原稿の種目
 - 中略
 - 雑録：内外の雑誌論文の抄録、学会の動向などについての紹介、その他、本会会員に有益な記事。
 - 学会記事：本学会及び他学会の行事集会などについての記事。
 - 2-3. 原稿の長さ：原著論文・総説・講座は14ページ以内、短報は6ページ以内、討論・解説は4ページ以内、資料は2ページ以内とする。
 - 中略
 - 4. 投稿手続き：投稿者は原稿・図・図版・表・送り状1部にそれらのコピーを2部添え、封筒に「第四紀研究原稿」と明記して編集委員会へ送付する。なお、図・表の原図は、編集委員会から要請があるまでコピーをもってこれに代えることができる。
 - 5. 受付
 - 編集委員会が原稿を受け取った日を受付日とする。
 - 6. 受付後の原稿の処理
 - 中略
 - 6-5. ワードプロセッサ使用の原稿の場合には、編集委員会は受理時の最終原稿を入力したフロッピーディスクの提出を求めることがある。
 - 7. 校正
 - 中略

14日以内に返送が無い場合には著者校正を省略するか、次号にまわすこともある。

改正後

- 2. 第四紀研究に掲載される原稿
 内容が日本第四紀学会の会誌の記事として適切であり、体裁が別に定めた「執筆要領」に合致すると編集委員会が認めたもの。
 - 2-1. 言語：日本語または英語
 - 2-2. 原稿の種目
 - 中略
 - 雑録：内外の学会の動向などについての紹介、その他、本会会員に有益な記事。
 - （学会記事：削除）
 - 2-3. 原稿の長さ：原著論文・総説・講座は刷り上がり14ページ以内、短報は6ページ以内、討論・解説・資料は4ページ以内、書評は2ページ以内とする。
 - 中略
 - 4. 投稿手続き：投稿者は原稿・図・図版・表・送り状のコピーを2部添え、封筒に「第四紀研究原稿」と明記して学会事務局（会誌奥付の学会事務センター）へ送付する。なお、編集委員会から要請があった場合には、図・図版・表の原図を提出する。
 - 5. 受付
 - 学会事務局が原稿を受け取った日を受付日とする。
 - 6. 受付後の原稿の処理
 - 中略
 - 6-5. ワードプロセッサ使用の原稿は、編集委員会は受理時の最終原稿を入力したフロッピーディスクの提出を求める。
 - 7. 校正
 - 中略

到着後7日以内に返送が無い場合には著者校正を省略するか、次号にまわすこともある。

1 4. 企画

- (1) 第6回日本第四紀学会講習会を1998年10月31日(土)・11月1日(日)の2日間、「年代を測る 放射性炭素年代の測定に向けて」をテーマに、名古屋大学年代測定資料研究センターにおいて開催する。会場・施設の都合で定員を15名とする。参加申し込みは9月30日締め切りとし、申し込みが多い場合は選考とする。本テーマについては関心が高いことから、出来るだけ多くの会員が参加できるように、第7回以降の講習会も年度内の早いうちに続けて開催できるよう準備を進めている。講師：中村俊夫・小田實貴・池田晃子(以上名古屋大学)・今村峯雄・坂本 稔(以上国立歴史民俗博物館)の各氏。

1 5. 会報

- (1) 『第四紀通信(QR Newsletter)』Vol. 5 Nos. 5, 6, Vol. 6 Nos. 1, 2, 3, 4を刊行する。
 (2) 文部省学術情報センターのインターネットWWWサーバ上の日本第四紀学会ホームページの充実を図る。

1 6. 渉外

地球惑星科学関連学会・自然史学会連合・地球環境科学関連学会協議会等との対応を図る。

2. 1998年度予算案
 別添資料参照

質疑応答の後、以上の1998年度事業計画・予算案が承認された

3. 投稿規定の改正について
 以下の投稿規定の改正が承認された(前ページ)。

4. その他の審議事項

- 評議員より執行部への意見・要望・提言
 ・財政が逼迫していることは理解しているが、それを理由として会員へのサービスが低下することの無いよう配慮していただきたい。
 ・大会の会場選定にあたっては、大学だけでなく、補助金のもらえるような(自治体などの)会場を選ぶことも考慮頂きたい。
 ・大会で参加費を取るとするといくらになるのか、参加者の負担があまり大きくならぬよう配慮をお願いする。以上については意見を尊重して今後幹事会で詳細を検討していくこととした。

総会議事録(1998年度)

日時：1998年8月27日(木) 11:05 ~ 12:30
 会場：神奈川県立生命の星・地球博物館 ミュージアム・シアター
 出席者：87名 総会委任状130

報告事項

- 1997年度事業報告
 真野勝友幹事長より、評議員会議事録(1998年度)にある報告事項の報告があった。
- 1997年度決算報告・会計監査報告
 松浦秀治会計幹事より決算報告があり、引き続き、遠藤邦彦会計監査より会計監査報告があった。
- 論文賞選考過程報告
 小泉武栄論文賞受賞候補者選考委員会委員長より、選考経過と結果の報告があった。
- 機関紙・財政等検討委員会報告
 小池裕子機関紙・財政等検討委員会委員長(代理山崎晴雄庶務幹事)より、委員会の検討経過と結果について報告があった。
- 日本学術会議・第四紀研連報告
 太田陽子第四紀研連委員長より、評議員会議事録にある報告事項の報告があった。
- 投稿規定の改正についての報告
 小野 昭編集幹事より評議員会において承認された投稿規定の改正が報告された。

審議事項

- 1998年度事業計画
 真野幹事長より、評議員会議事録にある事業計画の説明があり、承認された。
- 1998年度予算案
 松浦秀治会計幹事より、逼迫する財政状況と評議員会議事録にある予算案の説明があり、承認された。

日本第四紀学会1997年度会計監査報告に添えて

本日、1997年度の会計監査を行いました。監査報告書と共に、監査を終えての感想を述べさせていただきます。

大変に厳しい会計状況の中にあつて、会計幹事始め幹事会の努力により、支出の切りつめを進められ、単年度の赤字を最小限にとどめられたことに敬意を表します。しかし、学会活動の多様な展開の結果(それ自体は誠に喜ばしいことですが)とはいえ、極めて厳しい財政状況にあることに変わりはありません。既に幹事会を中心に様々な検討と努力をされておられますが、大幅な収入増が見込まれない現状において、会員全体に提供すべきサービスのレベルを低下させることなく、支出を押さえていく対策を迅速かつ適切に取られることが必要と考えます。

1998年8月17日

会計監査 坂上寛一・遠藤邦彦

日本第四紀学会論文賞受賞候補者選考委員会の要望

論文賞授賞候補者選考委員会において、論文賞の性格や内規などについて議論し、いくつかの問題点を見出しました。次回の選考までに問題点を改善されますよう要望します。

記

- 学会賞規定には、学会賞として「論文賞」が規定されていますが、学会賞を第四紀学の発展に貢献した人をたたえる「学会賞」と、若手で優れた論文を書いた人に与える「論文賞」または「奨励賞」に分けるべきだということで、意見が一致しました。ご検討の上、規定の改定を進められますよう要望します。
- 昨年と同様、今回も非会員の論文が受賞候補に上がり、そのため「論文賞」の性格をめぐって議論が必要になりました。混乱を避けるために、筆頭著者が正会員であることも、受賞の条件に入れるべきだと考えます。この点についてもご検討いただき、内規などの改正を進めていただければ幸いです。

資料(1) 1997年度収支決算報告書

収入の部 (1997年8月1日～1998年7月31日) (単位:円)

科目	予算額	決算額	増減	摘要
会費	13,381,550	13,727,489	345,939	
正会員	12,054,550	12,261,069	206,519	正会員(過年度)会費 10,799,000円(593,000円) 学生会員会費 760,000円 海外会員会費 109,069円
賛助会員	320,000	380,000	60,000	
団体会員	1,007,000	1,086,420	79,420	
誌代	4,000,000	2,695,453	1,304,547	Back No., 定期雑誌仕入, 露頭集
補助金収入	0	0	0	文部省科学研究費助成金
雑収入	1,000,000	738,160	261,840	会員名簿広告料, JICST, 超過頁代
利子収入	50,000	46,530	3,470	普通預金, 貸付信託, 金銭信託, 等
役員選挙積立金取崩	0	0	0	
名簿作成積立金取崩	800,000	800,000	0	1997年度積立金取崩
特別事業積立金取崩	0	0	0	
INQUA積立金取崩	0	0	0	
収入合計	19,231,550	18,007,632	1,223,918	
前期繰越金	1,299,192	1,299,192	0	
合計	20,530,742	19,306,824	1,223,918	

支出の部 (単位:円)

科目	予算額	決算額	増減	摘要
会誌発行費	7,900,000	7,283,840	616,160	第四紀研究 36巻3号～37巻2号 計5号
印刷費	6,000,000	5,698,270	301,730	各号 2,100部
編集費	1,700,000	1,564,570	135,430	
別刷印刷費	200,000	21,000	179,000	
会誌発送費	800,000	877,530	77,530	第四紀研究 36巻2号～37巻2号 計6号
会報発行費	620,000	620,235	235	第四紀通信 4巻4号～5巻3号 計6通信
会報発送費	1,030,000	1,033,750	3,750	(4-4～4-6 = 各1,900, 5-1～5-3 = 各2,000)
大会運営準備金	400,000	400,000	0	1998年用(神奈川県立生命の星・地球博物館)
巡検準備金	100,000	100,000	0	1998年用(神奈川県立生命の星・地球博物館)
特別講演会費	300,000	12,870	287,130	
予稿集印刷費	500,000	714,000	214,000	講演要旨集 400冊
学会賞費	200,000	118,910	81,090	副賞(50,000×2名), 委員会費用, 等
講習会費	100,000	0	100,000	
通信費	700,000	603,430	96,570	会費発送郵税, 関連学会プログラム送料, 等
会議費	50,000	42,420	7,580	評議員会・会計監査会議費, 等
旅費・交通費	300,000	208,520	91,480	幹事会旅費
印刷費	100,000	58,185	41,815	総会資料印刷, コピー代金
業務委託費	4,000,000	4,031,816	31,816	資料(4)参照
特別刊行物印刷費	0	0	0	
特別刊行物編集費	650,000	650,000	0	
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	0	0	
名簿作成費	1,200,000	943,900	256,100	会員名簿印刷(2,200部)
名簿発送費	450,000	570,990	120,990	会員名簿発送
特別事業積立金	0	0	0	
INQUA対策積立金	100,000	100,000	0	1997年度予算額計上
役員選挙費積立金	200,000	200,000	0	1997年度予算額計上
予備費積立金	0	0	0	
名簿作成積立金	0	0	0	
研究委員会助成金	80,000	80,000	0	40,000円×2委員会
雑費	100,000	94,223	5,777	各種タックシール・リスト出力, 宅急便代, 等
予備費	100,000	0	100,000	
支出合計	19,980,000	18,744,619	1,235,381	
次期繰越金	550,742	562,205	11,463	
合計	20,530,742	19,306,824	1,223,918	

資料(3) 1998年度予算案

(1998年8月1日～1999年7月31日)

(単位:円)

収入の部				
科目	1998年予算案	1997年決算額	1997年予算案	摘要
会費	13,462,780	13,727,489	13,381,550	
正会員	12,018,780	12,261,069	12,054,550	7,000円×1,674名×96% +5,000円×162名×95%
賛助会員	380,000	380,000	320,000	20,000円×19口
団体会員	1,064,000	1,086,420	1,007,000	10,000円×112口×95%
誌代	2,120,000	2,695,453	4,000,000	Back No., 定期雑誌仕入, 等
補助金収入	0	0	0	文部省科学研究費助成金
雑収入	280,000	738,160	1,000,000	広告料, JICST, 超過頁代, 等
利子収入	50,000	46,530	50,000	
役員選挙積立金取崩	200,000	0	0	1997年度積立金
名簿作成積立金取崩	0	800,000	800,000	
特別事業積立金取崩	0	0	0	
INQUA積立金取崩	1,000,000	0	0	
収入合計	17,112,780	18,007,632	19,231,550	
前期繰越金	562,205	1,299,192	1,299,192	
合計	17,674,985	19,306,824	20,530,742	

支出の部 (単位:円)

科目	1998年予算案	1997年決算額	1997年予算案	備考
会誌発行費	6,850,000	7,283,840	7,900,000	第四紀研究 37巻3号～38巻3号 計6号
印刷費	5,150,000	5,698,270	6,000,000	
編集費	1,600,000	1,564,570	1,700,000	
別刷印刷費	100,000	21,000	200,000	
会誌発送費	850,000	877,530	800,000	第四紀研究 37巻3号～38巻3号
会報発行費	640,000	620,235	620,000	第四紀通信 5巻4号～6巻3号
会報発送費	1,030,000	1,033,750	1,030,000	計6通信
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	1999年用(京都大学)
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	1999年用(京都大学)
講演会・シンポジウム費	100,000	12,870	300,000	
予稿集印刷費	520,000	714,000	500,000	
学会賞費	120,000	118,910	200,000	(副賞50,000円×2名), 等
講習会費	60,000	0	100,000	
通信費	350,000	603,430	700,000	会費発送郵税, 事務通信費, 等
会議費	50,000	42,420	50,000	評議員会会議費, 等
旅費・交通費	200,000	208,520	300,000	幹事会交通費
印刷費	100,000	58,185	100,000	総会資料印刷, コピー代金
業務委託費	4,150,000	4,031,816	4,000,000	資料(5)参照
特別刊行物企画印刷費	0	0	0	
特別刊行物企画編集費	650,000	650,000	650,000	130万円を1997年, 1998年で分割
INQUA対策費	200,000	0	0	38巻3号(INQUA特集号)編集費
役員選挙費	600,000	0	0	
名簿作成費	0	943,900	1,200,000	
名簿発送費	0	570,990	450,000	
特別事業積立金取崩	0	0	0	
INQUA対策積立金	100,000	100,000	100,000	
役員選挙費積立金	0	200,000	200,000	次年度に300,000円予定
名簿作成積立金	300,000	0	0	
予備費積立金	0	0	0	
研究委員会助成金	80,000	80,000	80,000	40,000円×2委員会
加盟学協会分担金	20,000	0	0	自然史学会連合
雑費	100,000	94,223	100,000	各種リスト・シール出力費, 等
予備費	50,000	0	100,000	
支出合計	17,620,000	18,744,619	19,980,000	
次期繰越金	54,985	562,205	550,742	
合計	17,674,985	19,306,824	20,530,742	

第9回幹事会議事録

日時：1998年8月1日 14:00～17:30
 場所：お茶の水女子大学 生活科学部本館1階会議室
 出席者：米倉会長，太田副会長，真野幹事長，松浦，小野，齋藤，奥村，中村，山崎，山本(学会事務センター)
 (欠席：辻，吉川)

各幹事報告

庶務幹事

- 論文賞受賞候補者選考委員会
委員長は小泉武栄氏に決定，第一回委員会を7月4日に実施した。委員による候補論文選考を実施，候補論文2件を選定した。論文賞受賞理由を執筆。
- 受賞候補者推薦・助成募集等
日本第四紀学会に対して沖縄賞，三宅賞候補者推薦依頼あり，第四紀通信を通じて会員に知らせた。
- 機関紙・財政等検討委員会
第三回委員会を6月25日に実施。骨子固まる。印刷費等の契約見直し，入札化，大会運営費の自己(参加者)負担などにより数百万円の支出削減が可能である。当面の財政危機は乗り切れる見通しがついた。小池委員長が答申案を執筆中。
- 受け入れ図書(7月15日現在)7冊

会計報告

97年度決算報告

- 決算総額は支出が-1,396,371円，収入が-1,223,918円で，繰越金は723,195円。
- 誌代売上げは露頭集が予定の半分だったが，予稿集が延び，落ち込みを押さえた。
- 名簿費は広告収入が前回より30万円減だったが印刷費も30万円少なかったので収支0。
- 特別講演会 会場費は0。非会員には旅費代わりに1万円を支払う。

行事幹事

- 地球惑星科学関連学会合同大会のプログラム委員には齋藤文紀および大場忠道両会員を選出した。
- 予稿集は200ページ，印刷部数は500部，販売価格は2500円とする。

会報幹事

- 第四紀通信5-4を8月上旬に発送する。記事の増加により20ページとなる。しかし，用紙の重さを押さえたため，送料は増加しない。

第四紀研連

- INQUA特集号(38巻3号)の原稿依頼の準備を行った。審議事項

庶務幹事

- 1998年日本第四紀学会総会資料について，寄せられた原稿を基に原案提示。
- 6号化，会報と会誌の同時発送については評議員会・総会で編集関係の審議事項とする。承認後，印刷会社との契約見直しによる印刷費削減を行う。

会計幹事

- 98年度予算案提示：予算案では会誌6号化，印刷費削減を見込み，センター委託費，発送費は従来通りとする。また，INQUA積立金は取り崩す。

編集幹事

- シンポジウム特集号について シンポ当日の昼休みに発表者で打ち合わせを行う。38巻5号(99年10月発行)，100ページを予定

企画幹事

- 第四紀講習会を10月31日，11月1日に名古屋大学年代測定資料研究センターで実施。木片を使って試料作成講習 募集案内は第四紀通信が間に合わないで総会の時にアナウンスし募集案内を配布する。第2回目の講習会は歴博を予定。・定員オーバーの場合は選考とする。そのため，申込用紙には参加目的を記入してもらう。

第四紀研連

- 国際会議関係の旅行会社からINQUA参加者のツアー募集の記事を第四紀通信に載せて欲しいという依頼があった。旅行社は複数あるので特定の会社だけに便宜は図れない。広告として募集を載せることは可能である。

会長

- 東大出版会より第四紀地図関係の転載2件の依頼について 承認した。

小野幹事よりニュースアナウンス

- 10月30日～11月10日の間に上高森遺跡への巡検を計画中，総会でアナウンスする。

第10回 幹事会議事録

日時：1998年8月26日 12:00～13:00
 場所：神奈川県立生命の星・地球博物館会議室
 出席者：米倉会長，太田副会長，真野幹事長，松浦，小野，齋藤，山崎，吉川(欠席：奥村，辻，中村)

庶務幹事

- 機関紙・財政等検討委員会の検討結果を報告した。
- 論文賞受賞候補者選考委員会の選考結果を報告した。評議員会・総会
- 1998年度第1回評議員会・総会の打ち合わせをした。

信州大学工学部社会開発工学科 公募

1. 学科・職種及び公募人員数
社会開発工学科 助教授 1名
2. 専門分野
理学・工学・農学を問わず，地学あるいは岩盤，地盤，土質関連分野
3. 担当授業科目 1年次向け：地学概論，地学関連科目，高年次向け：専門分野に関する科目，大学院博士前期課程：専門分野に関する特論
4. 応募資格
博士の学位を有し，10編以上の原著論文があること。年齢は45歳以下が望ましい。
5. 着任時期
平成11年4月1日
6. 提出書類
1) 履歴書，2) 研究業績リスト(査読の有無を区別

すること)，3) 主要論文の別刷(5編程度)，4) これまでの研究概要(2000字以内)。5) 今後の教育・研究についての抱負(2000字以内)。6) 推薦書，または，自薦の場合は応募者に関する意見を聞ける方の連絡先

7. 公募締切

平成10年11月30日(月)必着

8. 書類提出先・問い合わせ先

〒380-8553 長野市若里500番地
 信州大学工学部社会開発工学科 教授 泉谷恭男
 Tel: 026-226-4101(内2918), Fax: 026-223-4480
 E-mail: tdp0000@gipwc.shinshu-u.ac.jp

9. その他

- 1) 応募書類は封筒に「応募書類在中」と朱書の上，書留郵便で送って下さい。
- 2) 勤務地(工学部)は長野市ですが，1年次生向けの授業を行うために，週一回程度松本市に通っていた必要があります。

会員消息

1998年6・7月分

新入会員

正会員・学生会員

斎藤礼子（所属）(財)大阪土質試験所技術2部

久保田喜裕（所属）新潟大学理学部

田中利和（所属）応用地質（株）東関東事業部技術
部地質技術課

石塚成宏（所属）森林総合研究所北海道支所育林部
土壌研究室

落合桂子（所属）落合動物病院

二宮 淳（所属）住鋳コンサルタント（株）技術開
発部

坂本雄一（所属）東海大学海洋学部海洋資源学科

井上素子（所属）埼玉県立博物館学芸部資料地質課

何 宏林（所属）東京大学大学院理学系研究科地理
学専攻

賛助会員

(株)京都フィッシュン・トラック

所属変更

水山高幸（所属）岐阜聖徳学園大学

三好教夫（所属）岡山理科大学総合情報学部生物地
球システム学科

吉田栄夫（所属）立正大学地球環境科学部環境シス
テム学科

中嶋幸房（所属）基盤地質コンサルタント（株）地
質部

下野悦郎（所在）(株)西日本ソイルコンサルタント

香内 修（所属）福島県立博物館学芸課

渡辺 格（所属）千葉県立薬園台高等学校

染野 誠（所属）基盤地質コンサルタント（株）地
質部地質グループ

松山幸弘（所属）ジビル調査設計（株）

吉田 浩（所属）応用地質（株）技術本部ダム部地
質技術課

児玉 大（所属）札幌市立厚別北中学校

佐藤 賢（所属）(株)アイ・エヌ・エー地質調査部

田中英幸（所属）中央開発（株）北陸支店

野田啓司（所属）海老名市立大谷中学校

吉川尚伸（所属）愛媛大学大学院理工学研究科環境
科学専攻

川村弥生（所属）北海道教育大学函館校地学研究室

堀内俊秀（所属）いわき養護学校

畑 光一（所属）信濃毎日新聞更埴支局

竹村健一（所在）飯田女子高等学校

四十九勇治（所属）(財)鉄道総合技術研究所浮上式
鉄道開発本部土木部

木谷幹一（所属）環境基礎工学研究センター

滝谷美香（所属）北海道立林業試験場みどり環境部
応用樹木科

津野真一郎（所属）アジア航測（株）中部コンサル
タント部河川防災課

福島和彦（所属）パシフィックコンサルタンツ(株)
徳島営業所技術部

逝去退会 土屋 隆・小野晃司・井上克宏

退会会員 松本康裕・山田 毅

訃報

土屋 隆会員は1997年2月に逝去されました。

小野晃司会員は1998年4月22日に逝去されました。

井上克宏会員は1998年8月16日に逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

故井上克弘教授（岩手大学農学部） 紙碑

暑い夏、帰宅すると井上さんの奥様から送られた大型の封筒が届いていた。悪い予感がした。というのも昨年から体調がすぐれないことを聞いていたからである。果たして、封をあけると丁寧なお便りと、故人となった井上さんの業績表、葬儀次第があった。1998年8月16日逝去、享年54歳。全身の力が抜けるとともに、彼の写真をみていると、共に研究した日々が昨日のことのようによみがえってきた。

井上さんとはペドロジスト懇談会が主催した鳥取巡検で初めて会ったと記憶している。当時、私は日本海沿岸の風成砂層中の古土壌の解釈に悩んでいた。当時はこうした古土壌をレスなどの風成物質で解釈することは困難であった。現地ですら先生方に必死に質問していたのをみかねたのか、夜、井上さんが私の部屋に尋ねてきてくれた。彼に私の考えを説明すると、快く共同研究の約束をしてくれた。私が日本各地の土壌試料を送ると、まもなく20 μm以下の物質が黄土と似た性質をもつことなどを連絡いただいた。この結果を連名で1981年の日本地理学会と地学雑誌に、井上さんがペドロジスト誌にそれぞれ発表した。以後、日本各地、黄土高原、トルコなどを共同調査した。調査地で井上さんは驚くほど精力的に仕事をこなし、夜遅くまで研究の進め方について話しあった。ともに崖っぷちに立っているという緊張感がより連帯感を強めていたのである。彼は幼いころ母親と死別し苦勞した話しのことな

ど、個人的な話もよく話してくれた。

こうした研究をまとめて1990年の第四紀研究と91年のCATENAに発表した。このときの論文が内外で評価されるようになったので、苦勞した甲斐があったとよこんでいた矢先に井上さんは冥界に旅立ってしまった。彼が残した著書・論文は140編以上ある。短期間にこれだけの業績をあげたのは驚嘆するほかない。彼の緻密な頭脳と行動力は、それとは縁の薄い私にとって驚きであった。しかし彼は研究の推進にあたって常に苦しんでいたのも、私には彼が風成塵研究に着手したことがマイナスではなかったかと思うことも多かったが、その風成塵研究で1996年に日本土壌肥料学会賞を受賞されたので、これでよかったのかもしれない。1990年秋から東北地方の調査を始めたのを契機に、私はこれまでの考えを修正するのを感じなくなった。このことを井上さんに話す機会がないまま、私は風成塵同定にESR分析法を導入することに没頭するようになった。以後、レス研究を共同で進める機会がなく、寂しい気がしていたところ、一昨年、井上さんから風成塵に関する出版物の刊行計画の相談を受けた。しかし昨年6月に突然入院され、以後、自宅療養を続けられた。この正月に大学に通うまでに回復したとの便りをいただいたので、やがて全快もまじかであろうと出版計画を楽しみにしていたのであるが、実現したのは井上さんへの紙碑であった。

(成瀬敏郎)

訂正とお詫び

第四紀通信5巻4号に、5月25日に退会された森一郎さんについて、誤って訃報記事を掲載してしまいました。森さん並びに関係各位にご迷惑をおかけしたことをお詫びし、記事を取り消します。

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀学会広報委員会 広島大学文学部地理学教室 奥村晃史
739-8522 東広島市鏡山 1-2-3 kojiok@ipc.hiroshima-u.ac.jp
Phone: 0824-246657 Fax: 0824-240320

次号は11月中旬原稿締切-11月下旬発行予定です。
New!! 第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/qr/>で、
第四紀通信バックナンバーのPDF ファイルを閲覧できます。